

コミュニティデザイン Journal vol. 52

2022年7月15日

KCDラボ
で検索!



研究所
KOBE北・コミュニティデザインLab.

社会福祉法人陽気会

巻頭言一「意味」と「実存」一

今月8日(金)の午前11時半ごろ、奈良市の近鉄大和西大寺駅前で、参院選の街頭演説中に安倍晋三元首相が銃撃されたとの耳を疑うようなニュースが突然流れてきました。その後、心肺停止の状態ですぐ奈良医科大学附属病院に運びこまれ、警察はその場で40代の男を殺人未遂の現行犯で逮捕しました。その間、テレビやネットでは事件の様子や安倍元首相の容態を知らせるニュースが流され続けました。しかし、懸命の救命措置が施されたにもかかわらず、17時過ぎにお亡くなりになりました。参議院選挙を2日後に控えていたこともあり、事件直後からニュースでは「政治テロ」「言論封殺」に屈してはならないといった論調が目立ちました。確かに安倍元首相は憲法9条改正を目標に掲げ、日本の軍事力強化やロシアによるウクライナへの軍事侵攻を受けて「核の共同所有」を主張するなど、いわゆる「右派」「鷹派」的政治家とみなされてきたので、そうした報道になったのだといえます。

しかし、その場で逮捕された容疑者の供述によると、安倍元首相の政治信条とは関係なく、自らの母がある宗教団体の信者になり、そのことで生活にも困窮し、その宗教団体と安倍元首相とが深い関係にあると「思い込み」、犯行に至ったのです。こうした蛮行は決して許されるものではありませんが、仮に安倍元首相の政治信条に対するテロ行為であったのなら、わかりやすい図式のもとでの解釈がなされ、「テロに屈してはならない」「民主主義を守ろう」といったスローガンのもとで、ある種の連帯が生まれたのかもしれない。

でも、実際のところは、「遊説中」という警護上の隙の多い状況で、見当違いの逆恨みによる犯行だったというのが正確な状況でした。それだけにこの「隙」に関していえば、「いったい警備態勢はどうなっていたのか」、「十分に防ぐことができたのではないか」といった批判は免れないといえます。

とはいうものの、奈良県警を悪者にして留飲を下げるというのは、実はこの犯行と同じような心理的な構造にあるといえます。人は言葉を用いるようになったことで、「意味」を求める存在になりました。たとえば、なにかの事件などに遭遇したときに、よく「意味がわからん」とぼやくことがあります。つまり、人は意味不明な状況は耐えがたく、逆にそこになんらかの「意味」を見出すことができれば、なんとかやり過ごすことができるようになるのです。この犯人は、報道によれば高校まで超難関の進学校で過ごし、成績もほどほどに優秀であったものの印象が薄かったという同級生の言葉も



紹介されています。高校卒業後は海上自衛隊に入隊し、3年の任期期間を終えた後は、測量会社でアルバイトをしながら、宅地建物取引主任者や2級ファイナンシャルプランナーの資格を取得していますが、派遣社員として会社を転々としながら、今年の5月には派遣の仕事を辞めています。

父は急死し、母が宗教団体に多額の寄付をして破綻したとのことですので、まさに本人からしてみれば理不尽で不遇な状況に置かれていたといえます。人はこのようなとき、その「意味」を求めてしまいます。社会的には、宗教はこうした理不尽な状況に意味を与え、納得へと導いてくれる機能を有しています。そうした宗教が、彼を追い詰めたとしたらなんとも皮肉な事件であるとしかいいようがありません。

彼の場合、その意味を「あいつが悪いんだ」と特定の人間に求めたのだといえます。しかし、そうした言いがかり的な逆恨みのもとで、だれかを傷つけたとしても、いささかも救われることはありません。類似の現象として、「特定のだれか」ではなく「社会」全体に不満を投影することで無差別殺人に至る事件も頻発しています。その場合も犯行によって「救い」や「癒し」がもたらされることはありません。

こうした事件に共通しているのは、犯人が「孤独」であり、社会から「孤立」しているということです。ほとんどの事件で、犯行までの間に犯人は他者と接触した形跡がありません。「自我の牢獄」に閉ざされ、なにかに急ぎ立てられるかのように犯行に及んでいるのです。そうした人に必要なのは、その人の外側にある「客観的な真理」ではなく、その人が「いま、ここ」を生きる上での「実存的な意味」です。それは「他者」との関係を通じてしか、もたらされることはありません。お互いに他者を気遣い、思いやることのできるような社会にしていくために必要なことを、私たちは考えなければならぬといえます。

末筆ながら、謹んで故人のご冥福をお祈り申し上げます。

KCD ラボ代表 松端克文

シリーズ 情勢分析と運営・実践の処方箋

今月のテーマ：岡村重夫の地域福祉論

◆地域福祉と「地域共生社会」

今日の日本の地域福祉においては、「地域共生社会の実現」に向けて 2017 年の社会福祉法が改正され、市町村において包括的支援体制づくりを進めることが求められるようになってきている。さらに 2020 年の社会福祉法の改正においてはそれを推進するための「重層的支援体制整備事業」が創設され、いわゆる「個別支援」と「地域支援」あるいは「地域づくり」とを一体的に展開すべきであるとする「個別支援と地域づくりとの総合化スキーム」とでもいうべき議論が主流となっている。重層的支援体制整備事業においても、①断らない相談支援、②参加支援、そして③地域づくりに向けた支援を一体的に推進することが求められている。

そこで、こうした議論を岡村重夫の社会福祉と地域福祉に関する理論を参考にしながら整理してみる。

◆岡村の社会福祉学における地域福祉論の位置づけ

さて、岡村重夫の理論は、「体系建設型」の理論であるといえる。それは「自分の思考のうちに一つの体系ができあがっていて、個々の問題をどうやってその体系のうちに組みこむかをいつも考える」（荻部 2006『丸山眞男—リベラリストの肖像』岩波新書）という性格をもつものである。だとすれば岡村の『社会福祉学（総論）』（1958）により示された社会福祉学あるいは社会福祉理論の理論体系のなかに、地域福祉論も位置づけられるといえる。

しかし、そのように簡単に整理しきれない側面もある。岡村は自身の地域福祉論を確立する 1970 年代以前に、たとえば児童福祉の領域において 1947 年に制定された児童福祉法に端的に表れている施設保護万能主義を批判しつつ、非行少年問題を切り口に、その対応としてはケースワークやグループワークによる直接的な援助だけでは不十分であり、地域住民の組織化および児童福祉関連機関・団体・施設の組織化を図っていくための「コミュニティ・オーガニゼーション」が必要であることを主張するなど、すでに地域福祉の研究を始めていた。

また、地域福祉的な活動として、実際に地域に入って、住民と語り合いながら考える機会をもっていた。たとえば 1950 年には大阪市社会福祉協議会が設立される以前に結成されていた 2 つの区社協のうちのひとつである淀川区社会福祉協議会（当時）より依頼されて「アメリカに於ける社会福祉協議会」を翻訳している。そして 1951 年の大阪市社協の設立にも関与し、大阪市社協による「社会福祉問題地図」の作成を提案すると共に、自らがそれを引き受け約 2 年の歳月を費やして 1953 年に完成させ、それをもって市内全 22 区（当時）での説明会にも出向き、地域住民が「共同学習によって地域の改善活動に立ち上がる」ことの必要性を認識できるよう援助したり、「地域住民自身による地域踏査（self survey）」の取り組みへとつなげる援助などを実践していた。つまり社協活動は、小学校区域くらいの小地域において住民が主体的に取り組む小地域社協活動を基本とすべきであるということをも主張すると共に、自らそれを実践していたのである。また当時、岡村が住んでいた淀川堤防沿いの地区

に大阪市が道路建設の計画を打ち出した際には、住民と組織的に反対運動を展開して、その計画を中止させたこともあったといわれている。

こうしたことをふまえると、岡村の地域福祉論は自身が体系化した社会福祉理論の一部をなすというよりは、その理論構築上の基礎的な契機となっており、さらにいえば社会福祉理論とは表裏の関係、あるいは等値の関係にあって、その論じ方の観点が異なっているだけであると捉えることもできる。すなわち、岡村の社会福祉理論の鍵概念は「主体性」であるといえるのだが、それを生活者としての個人の主体性の観点から論じたものが社会福祉理論であり、地域の主体性あるいは地域住民の主体性の観点から論じたものが地域福祉論であるとも考えられるのである。

◆岡村の地域福祉論

岡村は地域福祉について、次のように述べている。「もともと社会福祉は地域社会での出来事なのであるから、地域社会が地域共同体であることをやめてからも、生活の場としての地域社会がある限りこの事情は変わらなかった」として、「社会福祉の手段としての地域社会ではなくて、反対に生活主体者としての地域住民の自己実現の手段としての社会福祉というべき」であり、「生活集団としての地域社会は、社会福祉の主体であるとみることができないのではないか。つまり、生活者集団としての地域社会の自発的・協同的行為による自己実現を援助するために社会福祉が登場するのである」としている。さらに続けて、「都合のよいコミュニティをつくらしたり、『指導』するという発想とは全く逆のもの」であって、「いわばこれに対抗して、地域社会自身の発意に基づく生活主体者独自の判断や主張を示し、それを実現するたえの行動をとるのが『地域社会の主体性』であり、それを援助するのが社会福祉である」としている（岡村 1980「社会福祉の固有性と専門性」嶋田啓一郎『社会福祉の思想と理論』ミネルヴァ書房）。

岡村の地域福祉に関する最初の著作である『地域福祉研究』（1970）においても、地域福祉を体系的に論じている『地域福祉論』（1974）においても同様の主張は貫かれている。

たとえば、次のように述べている。「社会福祉とは、元来個人の人間的欲求と社会自体の生存発展の欲求と調和均衡を保った状態にほかならないのであるから、かかる状態の実現を目的とする社会福祉活動の自足的主体となる集団は、特定個人ないし特定階級の利益のみを追求するものであることはできない。むしろこれらの特定利害の代表集団をそのうちに含みつつ、ひとつの統一をもって自己の集団意識を表現するようなものでなくてはならない。したがってそれは、社会事業施設によって代表される団体ではなくして、これらを含めた自足的な機能をもつコミュニティそのものであることがふさわしいであろう」（岡村 1970：38）。

このようにコミュニティを社会福祉の主体として捉える観点は、岡村の地域福祉論のというよりは、岡村の社会福祉学の中核に位置づけられるものであるといえるのである。これからの「地域共生社会」を実践していく上でも重要な観点であるといえる。

KCD ラボ代表 松端克文

（武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科教授）

*毎号ホットなテーマを取り上げ、ヒントを提供します。

ようこそ 陽気会へ ～国立のぞみの園ターミナル プロジェクトチームの皆さま～

6月23日(木) 国立のぞみの園から、古川事業企画部長をはじめ6名の皆さまが、当法人を来訪されました。

施設・事業所の見学のと、ターミナルケアに関する支援の状況や看護師との連携について、またその意義や課題等について意見交換を行いました。



ひだまり園

◆施設見学

児童発達支援センターおかば学園、ひだまり園、ハートフルホーム・ジョイフルホーム、ようき寮、デイセンター、有野ひだまり保育園の6か所を順に見学していただきました。

ひだまり園やハートフルホームでは特殊浴槽や入浴介助の状況など、デイセンターでは特性に合わせた日中活動の実践について、担当者より説明しました。



ハートフルホーム



ようき寮別館



デイセンター



有野ひだまり保育園

◆意見交換会

見学後、ひだまり園でのターミナルケアの実情について上田副施設長より報告を行いました。

ひだまり園では、開所した2017年5月から現在までのあいだに、10名のご利用者が病気や老衰で亡くなられています。そのうち4名の方がひだまり園で息を引き取られ、現場の職員で看取りを行いました。

ご家族には、延命について年に1回意向確認を行い、状況に応じてそのつど説明や確認を行っています。ひだまり園で亡くなられた4名のご利用者のうち、3名の方のご家族が「自然に任せる」という意向でした(1名は身寄りなし)。現場職員には医療的ケアはできないため、慣れ親しんだ空間で、これまで通りにその人らしく過ごせるよう支援を行っていました。(以下、質疑応答)

- Q. 「看取り」は、現場にとって大変なことだと思うが、その意義は?
- A. 「自分ならどうか」と考える。自分自身が最期を迎えるとき病院か慣れ親しんだ場所のどちらがよいか。自分がそうであるように、ご利用者もこれまで通りひだまり園で最期を過ごしたいと考えられるのではないかな。その思いに寄り添うことだと思う。
- Q. 現在のぞみの園では、入院が通常になっているので「看取りはこわい」と感じてしまう。最期に立ち合った職員のメンタルケアはどうしているのか?
- A. 非常にむずかしい。予想はしていても、心を込めて支援をしてきたご利用者が亡くされるということの喪失感はかなり大きい。決してひとりで抱え込まないようこまめに声をかけ合うようにしていた。

Q. 「看取りを行う施設」という意識はあるか？

A. 「法人内における終末期の施設」という位置づけであると思っている。それが職員にとって精神的な負担になることも考えられるが、看護師がこれから起こり得るだろうご利用者の変化（症状）を細かく伝え、いつでもフォローする体制をとっていた。

Q. 看護師と現場との関係性は？

A. お互いの“気づき”を共有できる関係性が重要であると考えている。普段から何気ない会話を通して、良好な関係性を築くことや、ご利用者が亡くなられたあとデスカンファレンスを行い、最期に立ち合った職員と精一杯支援したことを振り返り、話をする 것도大切だと思いつ実践している。



◆交流会

場所をサロンに移し、給食課の調理師による会席料理をいただきながら、意見交換会では話せなかったことなども、ざっくばらんに語り合いました。最初は遠慮している様子も見られましたが、共に食事をして、話が進むなかで打ち解け、それぞれの施設の現状や課題についても話が広がり、楽しい時間を過ごすことができていたようです。



◆ターミナルプロジェクトチームの皆さまをお迎えして

◎上田副施設長：とにかく緊張していましたが、経験してきたことについての内容でしたので、きちんと話せたと思っています。交流会では全く緊張せず、のぞみの園の診療所等のお話も伺えて楽しい時間となりました。

◎深草サービス管理責任者：意見交換会ではかなり緊張しましたが、交流会では緊張も解け、業務体制などについても話ことができました。参考になることも多く、大変よい刺激を受けました。

◎東田生活支援員：交流会から参加して、看取りの状況や日常的に看護師がいる支援体制と連携などについて話をしました。また、入職後半年で実際に看取りを経験してつらかった思いや、それでも看取りができてよかったと感じたことも話しました。

「在宅医療の観点から、施設においても、回復が困難なケースの場合、長期入院を続けるのではなく施設での看取りを検討してはどうか…」という提案が、2015年ごろより協力医療機関からあり、法人内でターミナルケアについての話し合いが始まりました。

ご利用者の高齢化が進むなか、ターミナルケアを見据えた施設の必要性を感じてひだまり園を開所しましたが、そこでもさまざまな課題が見えてきました。介護が必要になったご利用者に日常生活を穏やかに楽しく過ごしていただくための支援、体調急変時の適切な対応、そして終末期の支援という場面によって異なる課題です。「いかに健康に過ごしていただくか」、「穏やかに最期を迎えていただくか」など、さまざまな支援における感情の振り幅の大きさと向き合うには、看護師を含む現場職員のチーム力がないとむずかしいと思われます。ご利用者の最期に立ち合った職員のメンタルケアも含めて、ひだまり園ではその人の立場に立って寄り添うことが浸透しているように感じました。

のぞみの園ターミナルプロジェクトチームの皆さまとの意見交換を通して、ご利用者の笑顔を大切に「向き合っ寄り添う」ことの意味を、改めて考えることができました。ありがとうございました。（編集委員会）

最後になりましたが、事業企画部長古川様には日本知的障害者福祉協会、兵庫県知的障害者施設協会の研修事業を通じて、また公私を問わず種々の機会でのご指導、ご教示により、ひだまり園をはじめ法人の事業構築に多くのお力添えをいただきましたことに、心から感謝を申し上げます。（統括施設長 松端信茂）

シリーズ ～支援に繋がる心理学④～

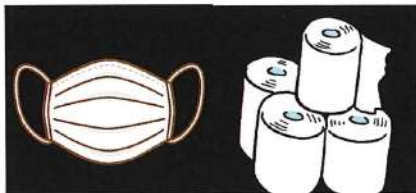
「ポジティブな言霊を使ってポジティブ行動」

前回は、「自己を高める」ために「目標（夢）」をもつことが行動を起こす動機につながることを紹介しました。今回は、言霊（ことだま）がテーマです。日本古来より「言葉には霊的な力『言霊（ことだま）』が宿り、現実の生活に影響を与える」と信じられてきました。それを心理学的観点でみていきます。

◆予言の自己成就（予言の自己実現）

根拠のない噂や思い込みであっても、人々がその状況が起こりそうだと考えて行動することで、事実ではなかったはずの状況が本当に実現してしまうことです。アメリカの社会学者ロバート・マートンが提唱しました。

2020年の春ごろ、新型コロナウイルスの感染拡大につれ、使い捨てマスクだけでなく、トイレットペーパーやティッシュペーパーが店頭で品薄になる事象が発生しました。SNSで「マスクとトイレットペーパーの原料は同じ」「新型肺炎の影響でトイレットペーパーが今後なくなる」「トイレットペーパーを買いだめしておかないと手に入らなくなる」といったデマが拡散したことが品薄を招きました。業界団体や政府は「在庫は十分ある。冷静な行動を」と呼びかけたにもかかわらず、実際にドラッグストアから紙製品がなくなり始めると、噂を信じていない人も購入するようになったため、より入手することが困難な状況になりました。



同様の「トイレットペーパー騒動」は、1973年（昭和48年）にも起きています。オイルショックをきっかけとする物資不足が噂されたことにより、日本各地でトイレットペーパーの買い占め騒動が起きました。トイレットペーパーが市場からなくなった後は、「次は、ノートがなくなる」という噂が広がり、ノートの買い占めや便乗値上げも起きました。

これらも「予言の自己成就」の一種です。周囲の噂や思い込みが真実になってしまうことは、第1回目の「ピグマリオン効果」と「ゴーレム効果」にも類似しています。

◆プライミング効果

心理学では、事前に示された情報に影響を受けて、行動や思考が変化する効果をプライミング効果といいます。プライミング効果には、「直接的プライミング」と「間接的プライミング」があります。

直接的プライミングでは「同じもの」を思い出します。「カレー」のCMを見たら、カレーを食べたくなり、「ラーメン」のCMを見たらラーメンを食べたくなるのは、直接的プライミングの効果です。間接的プライミングの例としては、10回ゲーム（10回クイズ）が挙げられます。相手に「膝（ひざ）と10回、言って」と伝えて、「ひざ、ひざ、ひざ…」と10回言わせた後に、肘（ひじ）を見せて、「ここは？」と相手に聞

くと、思わず、先に自分が言った関連性のあるものを思いだして「ひざ」と答えてしまうというゲーム（クイズ）です。

プライミング効果は、無意識のうちに起こるもので、よい方へも悪い方へも作用する現象です。普段から「どうせ自分にはできない」が口癖だったり、「あなたにはできない」という言葉を投げかけてきたりする人が周囲にいと、プライミング効果によって「できない自分」としての行動を無意識に取ってしまう可能性があります。「なにをやってもむだ」「疲れた、疲れた」ということばを常に吐き出している人は、周囲にいる人のやる気をも削いでいるかもしれません。

「心を燃やせ」「胸をはって生きろ」「頑張れ！俺はいままでよくやってきた！俺はできる奴だ！」等の名言は、昨年、大ヒットしたアニメで出てきた台詞です。この言葉の通り、登場人物たちは、不屈の精神をもち、あきらめずに「上弦の鬼」たちに立ち向かっていきました。ポジティブな言葉を受けることで、ポジティブな気持ちでいることができるのです。



◆認知的不協和理論

自分の考えと行動が矛盾したときに感じる不安を解消するため、考えを変更することにより行動を正当化する現象を説明した理論です。アメリカの社会心理学者レオン・フェスティンガーによって提唱されました。

日常生活での例を挙げると、喫煙者が、健康に悪いのがわかっているけれども、なかなかタバコをやめられないという状態が該当します。喫煙行為は健康に悪いということで、心理的矛盾が生じますが、「タバコはストレス解消になる。だからやめなくていい」と認知を変化させれば、矛盾はなくなります。別の例で考えてみます。仲よしの友だちを外先で見かけ、あいさつをしたのに、あいさつが返ってこなかったときに、どのように考えるでしょうか。仲よしなのに、あいさつが返ってこなかったという事実は矛盾を生じます。そこで、「相手が気づかなかったのか、自分の声が聞こえなかったのか」と考えることで矛盾が解消します。嫌いな相手であれば、「あいさつしてこないのは、相手も自分のことを嫌っているからに違いない」と納得するでしょう。

人は、不協和が高くなるように、情報を解釈します。自分の考えに合うように、都合がよいように解釈してしまうのです。

◆輝かせてくれる言葉にふれるように心がけよう！

言葉には心の状態が表れていることが多く、否定語は人の自信を失わせ、肯定語は自信を高めます。ポジティブな言葉は、周りの人たちにかけるとその人たちまで前向きになれる。それだけでなく、実は他人にかけたポジティブな言葉によって、あなた自身も前向きになれるのです。

ネガティブな言霊に引っ張られそうになったときには、ポジティブな言葉を声に出せば、前向きな自分を取り戻しやすくなります。ポジティブな言葉を見えるところに掲示したり、書いたりすることもポジティブ行動に繋がります。

（高畑 英樹）

ちょっといいですか？大西ですけど…

－福祉業界の性善説－

◆措置時代を思う

この業界が措置制度であった時代、施設の収入については、加算がどうか、職員配置がどうかといった複雑なシステムはなく、一人一月いくらというような単純なシステムであったと記憶しています。また、相談支援専門員やサービス管理責任者とかという職員も存在せず、支援員（当時は指導員）が、相談から援助計画の作成、そして日々の実践まですべてを担っていました。現在は、専門性という名のもとに分業制となり、各職種の守備範囲や業務内容が細かく決められています。いま思えば、措置時代は、いい意味で気楽に仕事ができているように感じます。

この業界が、大きく転換し始めたのは、2000年頃に始まった「社会福祉基礎構造改革」がきっかけです。措置制度に代わって支援費制度というものが導入され、その流れを受けて、障害者自立支援法を始め多くの関連法が制定また改正され、今日の障害者総合支援法に受け継がれています。わずか20年程の間に福祉の制度やシステムは大転換しました。

◆性善説を信じて

しかし、この業界で実際に働いている人、福祉をやろうと思う人の人間性や価値観というものは、そう大きく変わっていないように思います。基礎構造改革は、人の心まで変えることはできなかったようです。

福祉の仕事をする人は「いい人」という、いわゆる「性善説」を信じてこの業界は成り立ってきたように思います。時代がまた制度が変わっても、福祉に携わる人々の根底には、優しさや思いやりや人の幸せを願う気持ちが流れているものだと思います。それを「倫理観」の基本にしてきたのだと思います。だから、本来であれば、この業界は、虐待とか、パワハラとか、不正行為とかといった世間を騒がすような事件とは無関係なはずですし、無縁であるべきです。

しかし、なかにこの性善説を根底から覆すような行為をするやっかいな人物が存在しているのも事実です。ただ、そのような人物でも、この業界に入った当初は、(わずかもかもしれませんが)「いい人」の要素も持ち得ていたはずですが、それがなんらかの原因で、その要素を失っていき、福祉人としてさらに人間としての道から外れていった結果なのだと思います。

いま福祉業界の人材確保については、国を挙げて取り組んでいます。それに応えていくには、福祉を志す人の「性善説」を信じ、身を置くすべての人が「いい人」であり続けることができるようなシステムの構築が必要なのだと思います。(大西)



陽気会は「福祉ゾーン」としてのコミュニティの創造を目指します

陽気会は、1958年9月1日に知的障害児施設おかば学園を開所し、63年目を迎えています。

私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての「コミュニティ」をより暮らしていきやすくなるよう「デザイン」し、陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、皆さまと力を合わせて実践していきます。

ラボサポーター(協力会員)募集中です

施設・事業所サポーター 年間 10,000円

個人サポーター 年間 1,000円

サポーターの皆さま、いつもありがとうございます

陽気会の SNS

Facebook Instagram Twitter

フォローよろしくお願いします

編集委員会：松端 克文

大西 博之・朝日 満子

大島 由香利

〒651-1313

神戸市北区有野中町 2-5-19

社会福祉法人陽気会

KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.

Tel : 078(981)7271

Fax : 078(981)0825

HP : <http://youkikai.or.jp/>

Email: kcclab@youkikai.or.jp

